

考古資料からみた中世集落における消費活動

草戸千軒遺跡における資料形成過程の分析 鈴木康之

Characteristics of Consumption in a Medieval Town "Kusado Sengen": An Archaeological Study on Formation Processes of Medieval Artifacts

はじめに

- ① 計量分析をめぐる研究の現状
- ② 考古資料の形成過程
- ③ 消費財廃棄の過程
- ④ 集落における搬入と廃棄のモデル
- ⑤ 草戸千軒における消費活動の特質
おわりに

【論文要旨】

中世の消費遺跡をめぐる考古学的研究では、近年、資料の計量分析がさかんに行われ、数多くの成果が蓄積されつつある。しかしその一方で、分析結果を解釈し、過去の人間活動を復元するための方法は十分に論じられてはいない。

筆者は、考古資料から人間の消費活動を復元するためには、資料の形成過程についての分析が重要な役割を果たすと考えており、本稿ではまず Michael Schiffer による資料形成過程の概念を紹介した。Schiffer は、考古資料に示される過去の人間活動の痕跡は当時から変化せず現代にもたらされたものではなく、さまざまな文化的・非文化的の変換作用を経たものだと説く。さらに、変換作用が引き起こされる状況は「機能的文脈（現実の社会における関係）」と「考古学的文脈（遺跡・遺構における関係）」とに区分できることを示している。これらの指摘は、日本中世における消費活動を考古学的に分析する上でも参考になる点が多い。

形成過程分析の具体的事例として、草戸千軒町遺跡（広島県福山市）から出土した輸入陶磁器・滑石製石鍋・木製食膳具の分析を試みた。分析に際しては、集落に搬入された消費財がどのような過程を経て廃棄、あるいは相続されるかを示す「搬入と廃棄のモデル」を設定した。このモデルに基づいて資料形成過程を解釈することにより出土資料の計量分析結果に認められるいくつかの事象が、過去の人間集団の消費活動をどのように反映しているのかが推測できるようになる。検討の結果、耐久消費財はそれが生産され、流通した時期に多くは廃棄されないこと、生活環境の変化を契機に多くの耐久消費財が廃棄されることなどが、具体的な出土状況に即して説明できるようになった。また、草戸千軒の集落における消費財廃棄のパターンから、限定された空間内で密度の高い消費活動が行われていたことを指摘し、これが集落の「都市的」な特質の一端を示していると考えた。